

&Arts

第 17 号



特集 「アーティスト・イン・スクール」

「アート」と「マナビ」の現在形



INTERVIEW

中島佑太 / 樺澤洋子

アーティストコラム 後藤朋美



たとえば子どもたちが不自由や壁とぶつかった時、
「正しいかどうか」以外の物差しを持っていることが救いになるかもしれない。
アートを通して、自由でいられることやさまざまな視点があることを感じてほしい。

アーティスト・イン・スクール (AIS) とは、
アーティストやクリエイターが市内の学校へ出向き、
ワークショップや授業を行う事業です。これから地
域や文化を担っていく存在である児童・生徒たちと、
「おもしろい大人」であるアーティストたちが学校と
いう場で共に学び合います。子どもたちには表現力
やコミュニケーション力が身につくだけでなく、「自
由な発想力」や「ドキドキ」の体験にもつながること
があります。

「アートって、どんなもの？」
「自分にとって大事なものって何だろう？」
「自分には何が作れるんだろう？」

アーツ前橋では、「美術の授業」や「図工の授業」と
聞いてイメージされる絵画や彫刻の専門家だけでなく、
農業・料理・即興音楽・空間デザイン・身体表現
などのアーティストも多く派遣しています。

たとえば、教育とアート、アートと料理、料理と教育
……のように「一見関係なさそうに見えるジャンル」を
掛け合わせ、実はそれぞれがつながっていることを知
る営みは、想像力をひろげ、児童・生徒たちの内側から
新たな視点や考え方を生み出すことが期待できます。



これまでのAIS実施風景

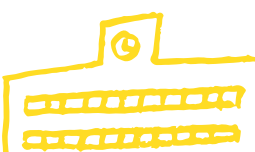


アーツ前橋の AIS に類似する活動は、川口
市立アートギャラリー・アトリア（埼玉）や、
AIS プランニング（北海道）のアーティスト・
イン・スクール、東京都現代美術館のスクール

プログラムなど、全国各地で行われています。
また、戸倉上山田中学校（長野）では、生徒
が学芸員となり学校を美術館にする「とがび
アートプロジェクト」が展開されていました。

SPECIAL
ISSUE

ア
ー
ティ
ス
ト
・
イ
ン
・
ス
ク
ー
ル



Example 1



ARTIST 山川冬樹
YAMAKAWA FUYUKI



IN 前橋市立 みずき中学校

心臓の鼓動など、身体内部の音をテクノロジーによって
拡張するパフォーマンスを行う山川冬樹。音楽、舞台美術、
地理、テクノロジーの歴史など、美術以外の領域まで広が
る解説も交えながら、身体を使ったパフォーマンスの鑑賞
や体験を行いました。喉や口の動きで美しい倍音を紡ぎ出
す、ロシア連邦・トゥバ共和国の伝統歌唱「ホーメイ」の
名手としても知られる山川さんの指導のもと、生徒たちも
これに挑戦。これまで意識してこなかった身体の可能性に
関心を持ったようです。「自分の身体でよく見て聞いて、
世界を知り、考えて工夫していくことが大切」というメッ
セージが生徒たちに送られました。



先生たちの声

普段は見えないものや聴こえないものを自分なりに
形で表現するということが、自分が知らないことを広げていくことが、生徒達にとっても勉強になった。今回の
授業は、山川さんは受験には関係ないと言っていたが、私自身は関係していると感じたので、受験前のこの時
期に実践できてよかったと思います。（みずき中学校 吉沢先生） ※「平成 29 年度 AIS 活動報告書」より

Example 2



ARTIST イルワン・アーメット
& ティタ・サリナ

IRWAN AHMETT
& TITA SALINA



IN 前橋市立 桃井小学校

インドネシアを拠点として活動するイルワンとティタ。
日本とインドネシアの共通点や自然災害をトピックに、描
く・話す・身体を使うなどの様々な表現方法で、子どもた
ちと共に作品を作り上げました。2018 年、インドネシアの
スラウェシ島沖で発生した M7.4 の大地震。そこで被災し
た子どもたちに寄り添い、彼らを元気づけるために、まず
は絵や文章でメッセージを描きます。

続いてメッセージ動画を撮影し、想いを声として残しま
す。最後には全員で大きな白い布を広げ、布の下から子ど
もたちが「指で」メッセージを描きました。これらの作品
はインドネシア・ロンボク島の子どもたちに届けられ、国
境を超えた思いやりが形となりました。

先生たちの声

子どもたちがのびのびと絵を描いたり、インドネシアのことを深く考えたりしていた姿は私たちにとって新しい
発見でした。普段、学校現場ではこういった経験をなかなかさせられないので参加できてとても良かったです。
（桃井小学校 吉野先生、大山先生、町田先生） ※「平成 30 年度 AIS 活動報告書」より

INTERVIEW 「図工」教育の枠を超えて

周りの大人の協力も必要。
「図工・美術とはこういうもの」の
範囲が広がったらいい。

中島佑太 アーティスト

—普段はアーティストとして、どんな活動をされているのでしょうか？

身の回りにあるルールや常識などを、「遊び」に置き換えてみるようなワークショップを行っています。一人で何かをつくるのではなく、保育園の子もたちや先生、地域の方々と関わりながら活動することが多いです。目に見える作品をつくことよりも、「想像をやめないこと、普段とは違う事を考えること」といった過程、つまり「考えること自体」に価値を置いています。

—学校という場を使って実現・表現したいことは？

現代美術の中には「ものをつくる」以外の表現方法もある、ということが学校に伝わり、「図工・美術とはこういうもの」の範囲が広がったらいいなと思っています。また、学校が、普段の生活の中で出会わない人と出会える場、そしてアーティストたちの活動の場のひとつになっていたら嬉しいですね。

学校のなかに「関わりの余白」を作る

—桃川小の現場ではどんなことを考えながら参加していたのでしょうか。

図工に苦手意識を持っていたり、自分の考えを表現することに抵抗を感じたりする子どもたちがいることに対して、アーティストとしては「学校教育の中の図工は表現手段のひとつでしかないよ」ということが伝えたかった。「これが分かりません、できません」とSOSを出すのも、不真面目にアイデアを出すのも表現のひとつです。たぶん、図工の授業に余白をつくろうとしていたんだと思いますね。

—子供たちとはどんな関わりを？

図工の授業に何週間か連続して関わり、子どもとコミュニケーションをとる中で、アイデアの相談に乗ったり、道具の使い方など具体的なアドバイスをすることもあります。表現の森（※）での関わりがメインなので、子どもたちと学校で話したことなどをもとに、校外でのワークショップを企画したりしています。子どもたちからは常にいろいろな反応を得続けていますね。

—学校の現場で困惑したことはありますか？

学校には評価がありますから、どうしても評価の良い人とそうでない人が生まれてしまうんです。それが原因で図工を苦手になったとして、その先にあるものは不寛容の世界だと

「学校」という立場からAISを見たとき、どんな景色が広がっているのでしょうか。2017年から桃川小学校の図画工作授業に参画している、アーティストの中島佑太さん。その中島さんと共に図工の授業を担当していた元桃川小学校教員、現宮城小学校教員の樺澤洋子先生にお話を伺いました。

思っていて。成績をつけるのは明確化することですが、アートは不明確なものです。人によって価値観が違うから、表現やその受け取り方も違って当たり前、というのがアートの考え方なんです。だから、学校の考え方にマッチしづらいのも当然かもしれない。今までにない考え方や取り組みにも、先生や子どもたちと一緒にチャレンジしていけたら嬉しいですね。—実際に学校の内部に入ってみて、考え方が変わった部分はありますか？

公教育は、やっぱり必要だなと考えるようになりました。ただ、それ以外の選択肢も増えていってほしいなと思っています。学校は「集団」ですが、ワークショップは「個別的な表現を尊重する場」でもあるので、それ以外の選択肢の1つとしてあり続けたいです。

視点を変えて、自分の意見を持つこと

—子どもたちの将来や日本の未来について、どんなふうに考えていますか？

個別的な主張に寛容な時代になったらいいなと考えています。日本には移民や外国籍も増加していますよね。「日本に生きること」は更新され続けているんです。また、見る方向によって物事は違って見えるということが、社会の考え方のベースになってほしいと願っています。そのために、アートから学べることはたくさんあります。例えば、丸いリングを上から見ると五角形であるように、学校の教材も視点を変えることで別のものを生み出せる可能性があります。これからそんな風に子どもたちと遊び続けたい。

※2016年よりアーツ前橋が福祉・医療・教育の団体や施設と連携し、アーティストと共に取り組んでいる5つのプロジェクト。そのうちの一つ「中島佑太 × 南橋団地」では、団地に住む子どもたちを対象に、敷地内の公民館などでワークショップを継続的に実施している。南橋団地は桃川小の学区内にある。
<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/>



2019年8月10日収録 聞き手／市根井直規

アーティストは自分たちの
ワクワクを引き出してくれる、
素敵な物を持ってきてくれる人。

樺澤洋子 前橋市立宮城小学校教員

教育の現場にアートのエッセンスを入れることの難しさ

—アーティスト・イン・スクールを学校に取り入れるまで、いくつかのステップがあったそうですね。

学校にはカリキュラムがあり、それを全うするのが教員の仕事です。また、新しい取り組みを採用するには、管理職や教育委員会の判断が必要なこともあります。桃川小学校でのAISを検討する際には「既に存在する枠組みの中に位置づけられれば実施できるのでは？」という助言を学校長からいただきました。たとえば、書き初めや珠算の授業で講師の方に来て頂いたり、朝礼で卒業生に話をしてもらうなど、外部の方を取り入れる動きは学校にも浸透していましたので、そのニュアンスでの採用を目指したんです。結果的に、「T2（※）」という教員の補助として中島佑太さんをお迎えすることができました。

—学校教育というと、どうしても画一的に教え込むようなイメージがあります。

構造として、実際にそういった部分はあると思います。でも、教育の質を向上させるために「どうにかしたい」と動いている人も出てきています。

たとえば多くの学校が秋に取り組んでいる「図画展」では「同じテーマ、同じ構図、同じ歩調で進める」という方法がみられることがあります。自分もこういった手段で授業をすることが多かったのですが、AISで中島さんと関わるうちに、図工のあり方について考え直すようになりました。そんな中、去年参加した研修での「廊下に飾られた子どもたちの絵を見て、上手く描けているがどれも同じようでハッとした」という県の指導主事の体験談がとても印象的で。「見栄えのよい作品づくり」

にとらわれていた部分があったことに気づかされました。

こんなふうに、学校教育としての「図工」に課題を感じ、新しい方向へ進もうという働きかけは確かにあります。技術を身につけ、完成度の高い作品を仕上げることも大切だけど、描きたい気持ちやクリエイティブな精神を伸ばしていきたい……。そのためには学校という仕組みを客観的に見ることも時には必要で、それを実現できるのはアーティストの方々などの「外部の人」なのかもしれません。

子供たちへの影響

—これまで中島さんと関わった中で、特に印象に残ったことは？

図画展のテーマで「虫をとったよ」というものがありまして。自分が豊かな表情で虫と接しているところを描く構図で、「虫を大きく描いてね」と指導しました。その図画展に取り組む児童の中に、図工が大好きなだけで戸惑っている子がいて。「虫はできるだけ大きく描いてね」と伝えても、頑なに小さく緻密に描いてしまふんです。私が「虫を大きく描かない子がいるんですが、どうしたらよいでしょう……。」と中島さんに相談したら、「いや～、虫はちっちゃいからね！」とおっしゃって（笑）。目からうろこでした。確かに虫は小さいわけですから、どちらかと言えば小さく描く方が自然な形に近いのかも、と思って。実際その児童の作品は、丁寧に描かれた虫を見つめる自分を堂々と表現した素晴らしい仕上がりでした。とにかく多角的な視点を持たなければと思ったエピソードですね。

—実際に子どもたちと中島さんが関わって、どんな反応がありましたか？

「中島さんはいつ来るの？」「早く会いた

い！」といった感じです（笑）。自分たちのワクワクを引き出してくれる、素敵な物を持ってきてくれる人。システム上、中島さんと関わらないクラスもあったのですが、「中島さん、僕たちのクラスにはこないの!？」「入っているクラスはいいな～」と羨ましがっていました。また、どうやら子どもたちは中島さんのお話は真剣に聞くようなんです。教師には聞きやすい。いちアーティストとして児童の間に浸透していく独特な存在だと感じました。中島さんは基本的に子どもたちを褒めながら交流しているので、「もっとワクワクを追求しよう！」となるのかもしれないですね。

学校とアーティストがそれぞれの役割で

教育課程も教科書も、時代とともに変わる部分があります。「影で遊んでみる」「教室の中に糸を張り巡らせる」など、「造形遊びをする活動」に分類される授業などは、子どもたちが生き生きと学べる楽しい要素が盛りだくさんで興味深いです。しかし取り組みに差があるのも現状です。

様々な課題に向き合いつつ、学校は学校の役割を果たすわけですが、課題解決のヒントを得るためにはもっと広い視野が必要で、AISのようなプロジェクトがそれをサポートしてくれるのかなと思っています。

教育とアートは、これからもどんどん混ざり合っていくのだと思います。現段階ではまだまだお互い歩み寄る段階ですが、これからアーティストの方々と一緒に学んだ子どもたちにとって宝物になるようなプロジェクトになる気がしています。

※複数の教師が協力して授業を行うTT（チームティーチング）という指導方法における役割

2019年8月2日収録 聞き手：市根井直規

INFORMATION

宇都宮美術館 第2回コレクション展
「僕らが消えても、世界はつづく？」
特設コーナー「宇都宮美術館 時のたび 準備室」
2019年9月1日（日） - 11月13日（水）

8月に宇都宮美術館で中島佑太が実施したワークショップ「宇都宮美術館 時のたび 準備室」のつづきと記録映像を、同館コレクション展展示室内にて展示中。
※詳細は、美術館公式HPにてご確認ください。 <http://u-moa.jp/>

COLUMN

アーティストコラム

「宇宙のはじまりから私たちまで」 後藤朋美

前橋の赤城山中腹に富士見町というところがあります。そこにはご自身の敷地に天文台を建てられた天体にとっても詳しい方がいらっやあって、私は時々そちらを訪ねて、天体観測をしています。

昨年の夏、ある書物で自然栽培リンゴ農家の木村秋則さんと理論物理学者の佐治晴夫さんの対談の為の挿絵を描いていたこともあり「宇宙の真ん中で」というテーマで実際の星を観察しながら絵を描いていました。天体観測の帰り道、夜空を眺め、先ほど望遠鏡のレンズを通して見た木星や土星、月の表面を思い出していました。そして地上から見上げる星の輝きに照らされながら「ああ、私は、これらの惑星と太陽の間や沢山の星々の間で、昼も夜もこの光に照らされて、立っているんだなあ。」と思いました。それから、夜道の心細さはなくなり、時々空を見上げては、自分の生きてる“今”という座標を意識するようになりました。

天体との思い出には、月明かりの下、母の背

中で子守唄を聞いた幼い頃、都内で当時の勤務先の屋上で見た大きな流れ星、そして旅の途中で見た風景などがあります。スペインの El Camino de Santiago の夜道 (約800km) をただひたすら歩いている時に見たオリオン座は、弧を描くように空を移動して「本当に地球はまわっているんだ。」と感じたことなど、身体で意識した天体は私の行動に大きな影響を与えます。

同時に、私は自分の意識の内側にある宇宙のはじまりのようなもの、をとても大切にしています。宇宙の誕生後、生成された星々の何度にもわたる生死の過程で出来上がった物質で構成されている私たちにも、光のかけらのようなものがあり、互いに呼応し共振しあっているのではないのかなと思っています。音・光・水、そういった原始の記憶を携えながら宿った魂は、次にどんな光景に出会うのか？どんな愛を生きるのか？そんなことを楽しみにしながら、今日も空を眺めます。



後藤朋美
GOTO Tomomi

前橋市生まれ。光の粒子に包まれるかのようなドーム型の作品。氷や海塩などを用いたインスタレーションなどを制作。今秋にアーツ前橋で開催中の展覧会「表現の生態系 世界との関係をつくりかえる」に参加、廣瀬智央+後藤朋美+のぞみの家のプロジェクトが紹介されている。「表現の森」(アーツ前橋・2016)、20周年記念関連ワークショップ「音の花束」(東京都現代美術館・2015) など。

視点を変えれば この街はワンダーランド！ 前橋 まちなかウォッチング

千代田町5丁目
(アーツ前橋北側)
エリア



いい雰囲気
の路地に
喫茶店の
看板を発見！



リンゴマークがかわいいお店の看板。



炎天下の取材日。暑過ぎて、サボテンが
某ウサギのキャラクターに見えてきました。



残念ながらお店は閉店……。

「うどんです しんかめです そばです
しんかめです すきです たべてます」
詩のまち前橋を代表するポエム看板。



銀座通り入り口のY字路は
&Arts16号表紙のロケ地。



「光 超高速 Internet」の文字が
レトロフューチャーで泣ける。



まち歩きで小腹が減ったら、
前橋名物・よね屋の甘太郎焼。
赤いのれんが目を惹きます。

WORKS

収蔵品紹介



Photo: 木暮伸也

平野 薫 《untitled-jacket-》
HIRANO Kaoru untitled-jacket-
平成 20 (2008) 年 ジャケット 平成 30 (2018) 年度購入

アーツ前橋では、平成30年度に9作家35点の作品を新たに収蔵しました。前橋市がこれまでに収蔵してきた作品は約750点になります。これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残して伝えていく贈り物です。ここではその中から一点を紹介します。

衣服が呼び起こす、身体の記憶

空間のなかに溶け込むように、柔らかな光や空気をはらませながら、ハンガーに吊るされた無数の糸が結び付けられたものが、床に向かって円錐形に広がっています。《untitled-jacket-》は、ジャケットの横糸を一本一本解ほどき、縦糸に結び付けて再構成した作品です。

平野薫は、かつて誰かが着ていた古着や布製の小物などを糸の一本一本にまで指でほぐし、さらに順番はそのままに結び直して再構成するインスタレーションをおこなってきました。「抜け殻である主なきものに、主の存在を着せ直すという行為」(『DOMANI・明日展2013』図録)であると平野は語るように、ジャケットやワンピース、傘や靴といった身の回りにあるモチーフが、糸の状態に戻されることで、それを身に着けていた人の「気配」や「身体性」をも感じさせます。そして鑑賞者にとってみれば、見ず知らずの他人のものであったとしても、個人の経験や想像とともに新たな「記憶」を呼び起こすでしょう。

平野 薫 HIRANO Kaoru

1975年長崎県生まれ。2003年広島市立大学大学院芸術学専攻科博士後期課程修了。文化庁新進芸術家海外研修制度およびポーラ美術振興財団在外研修員としてドイツに滞在。現在は広島県に戻り制作している。2003年から〈untitled〉シリーズをはじめ、現在も少しずつ素材を変えながら制作する。近作では、個人的な記憶や物語に集合的な記憶や物語を重ね合わせるような作品を制作している。

ARTIST IN RESIDENCE 滞在制作アーティストの今

ARTIST

片山真理
KATAYAMA Mari

滞在期間：56日間

2014年9月30日～10月29日 /
2015年2月19日～3月16日



片山真理さんの参加している展覧会、第58回ヴェネツィア・ビエンナーレ「May You Live In Interesting Times」は2019年11月24日まで。

2019年8月の時点で21組のアーティストが前橋に滞在し、作品の制作やリサーチを行いました。アーツ前橋の滞在制作では、作品の完成よりも充実したリサーチや普段の制作とは異なる地で経験してもらうことで新しいアイデアを生み出すことに重点を置いているため、作品が帰国後に完成することが度々あります。

2018年10月に行った「つまずく石の縁 一地域に生まれるアートの現場」では、これまで前橋に滞在した作家から10組にもう一度声をかけ、出来上がった作品を街中で展示する展覧会を開催しました。

また、それぞれのアーティストが世界各地で活躍を続けています。

イタリアのヴェネツィアで1895年にはじまり、様々な国がパビリオンを持ち、自国のアーティストを紹介することから「美術のオリンピック」とも称され、毎回世界中から大きな注目を集める国際展「ヴェネツィア・ビエンナーレ」が今年開

催されています。その「ヴェネツィア・ビエンナーレ」の企画展に、豎町スタジオができてから初めての滞在作家であった片山真理さんが参加し、大きな注目を集めています。そして、なんと前橋で撮影された作品《30 days in tatsumachi studio》も展示されています。

片山真理さんのほかにも多くのアーティストが活躍の場を広げています。アーティストたちのその後の活躍を定期的にお伝えしていきます。





EVENT

まちなかイベント情報

2019 Oct. - Dec.

「羽の生えた想像力ー阿部智里展」

7月20日[土] - 10月20日[日]
9:00 - 17:00
前橋文学館 2階展示室

「ドラマチックな重綱!! 高荷義之原画展」

10月5日[土] - 2020年1月13日[月・祝]
9:00 - 17:00
前橋文学館 3階オープンギャラリー

まえばし草映画まつり

10月19日[土] 10:00 - 18:00
前橋シネマハウス シアター1

第十七回 全国アマチュアちんどん競演会 in 前橋 2019

10月19日[土] 12:00 -
前橋中心商店街、前橋中央イベント広場

前橋めぶくフェス

10月26日[土] - 27日[日]
【26日】11:00 - 20:00 【27日】11:00 - 16:00
中央イベント広場、中央通りアーケード

うまや 駅家ノ木馬祭

10月26日[土] 11:00 - 16:00
大蓮寺前〜前橋中心商店街

舞踏団トンドテ空 地面舞踏劇「とめどなく」

10月26日[土] - 27日[日] 13:30 -
オリオン通り商店街

萩原恭次郎生誕 120 年記念展 「何物も無し! 進むのみ!」

11月2日[土] - 2020年1月26日[日]
9:00 - 17:00
前橋文学館 2階展示室

SHOP

mina
ミーナ



アーツ前橋1階のミュージアムショップminaが2019年4月にリニューアル。店内には全国の福祉作業所で生まれたカラフルで楽しいアートグッズが並びます。新しくなったminaを取り仕切るのは、障害者の就労支援を行う社会福祉法人明清会ガーデンタイムの齋藤拓さん。ショップ運営は初めての試みで戸惑うこともあるそうですが、障害を持つ方を販売スタッフとして起用するなど、minaならではの場所作りに取り組んでいます。

EXHIBITION

アーツ前橋 展覧会情報

表現の生態系 世界との関係をつくりかえる

2019年10月12日[土] - 2020年1月13日[月・祝]

開館時間: 10:00 - 18:00 (入場は17:30まで)

休館日: 水曜日、年末年始(12月28日〜1月4日)

観覧料: 一般 600 円 / 学生・65 歳以上・団体(10 名以上) 400 円 / 高校生以下無料

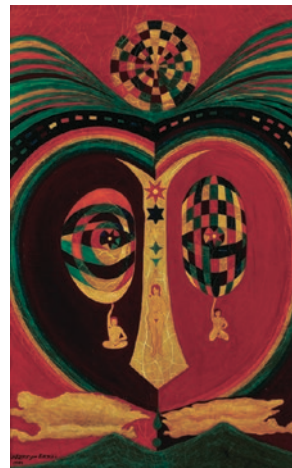
* 2019 年 10 月 28 日(月)群馬県民の日、12 月 10 日(火)世界人権デー、
2020 年 1 月 9 日(木)前橋初市まつりは無料。

* また、以下の方は無料でご入場いただけます。

- 1) 障害者手帳をお持ちの方とその介護者 1 名
- 2) 雇用保険受給資格者証をお持ちの方で求職中の方
- 3) 児童扶養手当証書をお持ちの方
- 4) 要介護(支援)認定有効期限内の介護保険被保険者証をお持ちの方
- 5) 難民認定証明書をお持ちの方
- 6) 生活保護受給票をお持ちの方
- 7) 教員
- 8) 福祉施設に勤務されている方
- 9) 美術・医療・福祉・教育を専門に学ぶ学生



尾花賢一《風男》2019 年 作家蔵



金井南龍《龍宮の花火》1969 年 さすら蔵

アーツ前橋では、福祉、教育、医療などの分野と協働して行う「表現の森」プロジェクトを2016年から始めました。現代社会において分断されている生の全体性を「表現」を通じてつなぎ直すことで、社会に存在するさまざまな社会課題に対し美術館やアーティストがどのような役割を持ちうるのかを考える試みです。本号で紹介する中島佑太と桃川小学校のAISプログラムももともとは、南橋団地で行ってきた表現の森の活動の延長線上にあります。

「表現の生態系」展は、表現の森で考えてきたテーマを宗教や歴史というもう少し大きな視点から掘り下げる展覧会です。表現の森で活動する滝沢達史 × アリスの広場や廣瀬智史/後藤朋美 × のぞみの家は、これまでの活動の中で出会ってきた人やものとの関係を改めて見直します。また、石坂玄士/山賀さくろ × えいめいは、市内のそのほかの高齢者施設でも活動を始めるなど、4年間の活動の蓄積がそれぞれに変化を見せています。Port B は、あかつきの村で作品を展開する予定です。また、尾花賢一は赤城山に着目し、

国定忠治から暴走族まで歴史と現代を行き来しながらこの山に生きたアウトローの足跡を作品化します。京都在住の中村裕太はかつて赤城山芸所を運営した東宮稔をテーマに、また中之条在住の糸井潤も赤城山に存在する聖なる領域をテーマに新作を発表します。

新たなプロジェクトとして、県内でLGBTQの支援を行うハレルワとあかたちかこは、レインボープライドパレードに参加するまでを作品化することで、私たち一人一人がマイノリティの権利に対してアクションをすることの大切さを伝えます。本展では、歴史や異なる地域を横断しながら世界との関係をつくりかえていく実践こそ、現代の芸術に託された重要な役割なのではないかという期待を込め、31組のアーティストの作品やプロジェクトをご紹介します。

「表現の森」については特設サイトをご覧ください

<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/>

&Arts ISSUE 17

アンドアーツ 第17号

発行: 令和元年10月12日 企画・発行: アーツ前橋

アートディレクション・編集・デザイン: 殿岡 涉(あしか図案) 取材・文: 市根井直規 写真: 土屋ミワ(本屋写真館)、木暮伸也(Lo.cul.p) ロゴデザイン: 荻原真貴

アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16 TEL: 027-230-1144 FAX: 027-232-2016